

遠干潟（とおひがた）

佐藤恒道作 永田錦心作曲

（歴史的背景）

源頼朝が開いた鎌倉幕府も、源氏が三代で途絶えると、北条氏が執権として政権を取り仕切るようになりました。

朝廷の権威を高め、公家の政治を取り戻そうとする後醍醐天皇は、北条氏に反感を持つ武士たちに倒幕を呼びかけます。これに呼応して上野（こうづけ・群馬県）の新田義貞は、鎌倉幕府を倒すため鎌倉の入り口まで攻め上りますが、鎌倉は小高い山々に囲まれて容易に馬を乗り入れることが出来ず、狭い切り通しの道に阻まれて難攻不落でありました。

そこで義貞は稲村ガ崎の岩に立ち、竜神に祈りを捧げ、太刀を海に投げ入れますと、あら不思議、潮が見る見るうちに引き始めました・・・

（詞章）

ここに上野の住人 新田小太郎義貞は 宮の令旨を畏みて 逆賊北条高時を
只一戦に討破り 二万余騎を引き具して 片瀬・腰越打渡り 極楽寺坂へぞ押し寄する

敵の後陣を見渡せば 稲村ガ崎に押し寄する 怒涛の音ぞ凄まじき 義貞馬より
飛び下りて 胃を脱いで跪き 海上遥かに伏し拝み 赤心こめて 祈るよう
今や我が君 畏くも 逆心輩にさへぎられ 西海の浪に漂い給ふ 臣、不才を
顧みず 剣を把りて打向ふ 心の程を哀み給ひ 潮を万里の外に退け みかど
を迎へ奉るべき 道を開かせ給へやと 佩きける剣抜きとりて 恭しくもおし
戴き 颯とばかりに投げ入れたり

さても不思議や未だしも 絶えて干ることなかりける 浪漫々の海の面に 黒
雲下ると見えけるが 俄かに海風巻き起り 渦巻き返す浪の音 とどろとどろ
と鳴り渡り 引くや潮のとをとをと 見る見る中に十余町 浅瀬となるぞ 訝
しき 横矢射んとて構えつる 数千艘の敵船は 艫櫂をたてん術もなく 引く
潮波にもまれつつ 沖合遥かに漂いぬ

義貞この様見るよりも 軍扇さっと押しひらき 「アーラ有難や竜王の 道
を開かせ給ひしぞ 戦勝正に覚えたり 者共進め」と下知すれば 二万余騎の
軍勢は 稲村ガ崎を打ち渡り 鎌倉城下に討って入る 義貞ここぞと下知をな
し 稲村ガ崎の東西に 火を散々に打ちかくる 入り乱れたる敵味方 渦巻く
猛火の只中に 火花を散らして渡り合ふ 死骸は積んで渦高く 流るる血潮に
稲村の 浪も色めくごとくにて どよめき渡る鯨波の声 天地を崩すばかりな
り さしも劇しき戦に 破れ果てたる高時は 武運も今は尽き弓の 引く力さ
えなくなかも 修羅の巷を遁れいで 葛西ヶ谷に落ち延びて 栄華の夢も結び
かね 一族郎党諸共に 腹搔き切ってぞ果てにける

(琵琶のはなし)

「琵琶」は紀元前二～八世紀頃、古代サザン王朝ペルシャ（現在のイラン）で発祥しました。この楽器は西洋に伝わって「リュート」となりました。東方へはシルクロードを伝わって、中国で「琵琶（ピパ）」、インドで「ビーナ」と呼ばれる楽器になりました。

この二つが仏教の伝来とほぼ同時に、六世紀頃、日本にやってきました。中国経由の琵琶は「雅楽琵琶」となり、宮廷貴族の楽器となりました。一方インド経由の琵琶は、仏教の影響を受けた形で「盲僧琵琶」と呼ばれ、「盲目の僧侶」が諸国を行脚しながらお経を唱えたり、諸国で起こった色々な出来事を語り伝えて聞かせる時の伴奏楽器となりました。薩摩琵琶は「盲僧琵琶」の仲間です。

(鎌倉と薩摩琵琶)

鎌倉時代、鎌倉は大変琵琶が盛んでした。当時、琵琶法師（僧衣姿の盲目の人）達が辻々に立って、人々に琵琶を奏でて聴かせておりました。

源頼朝の息子に忠久（母は比企氏の娘・丹後内侍。政子ではない）がおりました。頼朝はこの忠久に島津姓を与え、薩摩（鹿児島県・当時は島津荘）に赴任させますが、この時優秀な琵琶法師たちを大勢一緒に連れて行かせました。このため薩摩では琵琶が大変盛んになり発展します。十七世紀になって、薩摩藩主・島津忠良はこれまでの盲僧琵琶を大きく改良しました。そしてこれを薩摩琵琶と名づけ保護育成しました。

明治維新になって薩摩は大挙して江戸（東京）に上りますが、薩摩琵琶も江戸に上り全国に広がりました。「薩摩の琵琶」の源は鎌倉であるといえるでしょう。

仏文：目黒安子（社団法人鎌倉日仏協会）